

『凜』で加速する。ブルクワレーベルの快進撃

●根本憲男
●著者 吉成行夫 (Ayako Ino) 編集部

本誌2月号特集「好きピアノ」で、1月に発売のピアノデュオ作品『凜-凛-』を携え登場した安田美光央さんと石井彰さん。そのリリースライブは現状一歩進りのものとして、東京・渋谷のアコースティック・イベントスペース「公園通りクラシックス」にて行なわれた



ライブは向かい合わせで2台のセミコンサートグランドピアノがセットされ、途中で床を入れ替える時間を保みながら進行、音で交わされる二人の「対話」が、数々の聴衆の心を揺さぶる。なおブルクワレーベルでは、本誌読者に向けて『凜-凛-』の楽曲から3曲を無料プレゼント中。詳しくは「月刊ステレオプログラム」にて確認を



会場にはアーティスト・吉田美奈子さんも訪れ、終演後には談笑するシーンも。深くところではこの三人でのライブ企画も進行中とのこと。新たなプロジェクトの発展に期待が高まる

安田美光央のCDは、ヨーロッパでの活動としてはドイツに拠点を置く名門レーベル「ウインター&ウインター」からリリースされているが、日本では自身が主宰する「POURQUOI L'ABEL」(ブルクワレーベル)で精力的な活動を展開している。去年の「MY DEAR - Mari Adachi Plays Fujio Yasuda」に続いて今年リリースしたのが、安田美光央と石井彰のピアノデュオ作品『凜-凛-』である。

発売から2日後の1月27日、渋谷・

公園通りクラシックスにて、コンサートの開催された。このCD発売にまつわる安田と石井のライヴはこの他には予定されておらず、唯一のものになる予定だ。会場には2台のグランドピアノが置かれ、客席と演奏者との距離もかなり近かったため、観客はPAを通さないピアノの生音を浴びるようにして堪能できたのではないかと。この日の会場には、ジャズ・バニーズ・ポプス界のカリスマ的存在である吉田美奈子さんの姿もあった。

1曲目は「ソング・オブ・ネンナ」。安達真理の全編ピチカートによるヴィオラの演奏も記憶に新しい安田の代表作だ。安達が奏でる感傷な音世界とは対照的に、この日のピアノデュオでの演奏はいくぶんおらかで開放的だった。おそらに僕には聴こえた。おそらくそれは石井彰のピアノによって生まれた情感だったと思われる。とにかく数多くのライヴステージをこなしてきた石井は観客の前に立つと生き生きするようだ。そして、安田の楽曲を客の前

で演奏できることの喜びが、演奏するその姿にもみながっていた。またこのような石井のピアノに導かれて、この日は、厳密に構築された音作りよりも、ジャズのな対話を彷彿とさせる場面も多かったように見受けられた。そして、そうであつてもやはり、安田美光央の世界。なるものは堅固に守られていたと思う。

『凜』リリースライブで目の当たりにしたシーン

高橋慎一(写真家、映画作家)

クラシック〜現代音楽を背景に持ちつつボーダーレスな演奏活動を行なう安田と、日野皓正グループでの20年に及ぶ活動によりジャズシーンに大きな足跡を残す石井。それぞれ異なるがゆ世界観を持つ2人のスリリングな邂逅はCDですでに堪能していたが、ライブという一期一会の空間で、より強度を増した音による緊張と快楽を体験できた。

会場に用意された2台のヤマハのセミコンサートグランドは、サイズ以上の響きで観客の意識を捕縛したかと思うと、次の瞬間には軽やかなピアノシモで会場の空気を支配する。ジャズの大担と、クラシックの精緻、渾然と絡み合う二人の圧倒的演奏に心を震わされたままの90分だった。



レーベルの愛弟子は 欧州で活躍の海外奏者と共演

このライブの約1週間後の2月1日、安田の愛弟子であり、ブルクワレーベルから「Flying」を発表しているAyako Ito（歌&ピアノ）が、ヨアヒム・バーデンホルスト（クラリネット）をサポートメンバーに迎え、神楽坂のTHE GLEEにてライブを行なった。ヨアヒムはヨーロッパの現代ジャズシーンで有名なクラリネット奏者であり、安田との共演も多い。

SpotlightやAmazon Musicに契約されている方は、試しに「Fumio Yasuda」で検索していただければ「Forest」



作曲・編曲・ピアノを安田実光さん（写真中央）に依頼。21年12月にブルクワレーベルからアルバム『Flying』を発表したAyako Itoさん（写真左）、ついにそのリリースライブが開かれることとなり、アルバムでも共演したベルギーのクラリネット奏者、ヨアヒム・バーデンホルストさんも駆けつける



リリースライブは2月、東京・神楽坂THE GLEEにて、Ayakoさんのフォーカスピアノに、ヨアヒムさんのクラリネットもワックスというデュオ編成で行なわれた

というアルバムが見つかると思うので、表題曲「Forest」を聴いてみて欲しい。たゆたうようなふくよかだが、洗く影のあるクラリネットを吹いているのがヨアヒムだ（ちなみにベイスは井野信義）。Ayakoがアルバムを作るにあたって、ヨアヒムのコラボレーションを強く推したのは安田だそう（Ayako）。「絶対にヨアヒムと共演したほうがいいって言われて」。

この日ステージでAyako自身が「どのジャンルに入れればいいのか」と苦悶交じりに話していたように、彼女の音楽はポップスのようにとっつきやすくはない。ほとんどの曲を「詞から先に作る」という彼女は、自分が思い描く世界をまずは自分の声をベンの

ように使って輪郭を描き、そしてベンから筆を持ち換えるようにして、こんどはピアノでまた線を引く、そしてクラリネットにまた別種の線をその上に描いてもらうというような音作りになっている（ように僕には聴こえる）。

Ayako Itoの音楽には目的地を決めないあどけない旅のような魅力がある。ライブで披露した意外と打鍵の強い思いきりのいいピアノと、ヨアヒムのクラリネットと彼女の声の絡まりが、不思議な魅力に溢れた音の場を作っていた。

活発な安田の活動から つくつく目が離せない

さて、このヨアヒムに安田、さらにジャズ界を牽引してきたベイススト井野信義を加えたトリオが、2月4日に横浜エアジンで、2月5日は千葉のキャンディでライブを行なった。演奏されたのはすべて安田が作曲した曲であるが、この2日間はジャズの自由度がさらに増した演奏が繰り広げられた。

僕が注目したのは井野のベイスであった。特に1曲目に披露された、「昨日書いたばかり」（安田談@エアジン）の「STAYYY」における井野の（特にエアジンでの）ベイスソロは「流



魅力的な活動も続ける安田実光さん、Ayako Itoさんのライブ数日後にはヨアヒム・バーデンホルストさん、ベイスの井野信義さんとのトリオで2日連続のライブを敢行。写真：千葉・稲毛のJazz Spot CANDYにて、グアイオリニストの石井龍大さんが飛び入りしたシーン

石」と唸りたくなる存在感を放っていた。エルヴィン・ジョーンズから高い信頼を得、高柳昌行とともに（このグループには一時安田もいた）先鋭的なジャズシーンを牽引し、渡辺香津美ら連綿のミニージャズシーンらとのぎあつてきたベテランの底力を感じた。観客のなかに、音楽ライターやプロのミュージシャンが多いのも印象的な2日間だった。

ブルクワレーベルは今年も安田実光のアルバム制作を行なう。それは、これらのライブとはまた違った、もっと厳格に構築された世界になる予定。あつと驚く演奏者も計画中である。ぜひご期待ください。（敬称略）

今月の特選盤

石田善之

やや長めの残響成分が伸びやかに美しい
2台の銘器が織りなす唯一無二のピアノズム

「凧 -RIN-」



●安田美充央、石井 彰 (ピアノ)

ブルクフレーベル
POUR1009
¥3,000 / 1月25日発売

安田美充央は現代作曲家でありピアニストでもある。共演者はジャズピアニストである石井 彰で、安田の作品10曲で構成されている。2022年4月と10月にかながわアートホールでセッション収録されていて、向かって左に安田のスタインウェイD274、右に石井のヤマハCFⅢが位置しているが、左右を明瞭にして音像を配置するというよりも響きそのものが一体となり一つの音楽を表現している。それぞれの微妙に異なる音色も聴きどころだが、全体的にやや長めの残響成分を伴い、伸びやかに美しく、雰囲気としてはECM録音のキース・ジャレットを思わせる。

素朴な響きを聴かせるバッハ最愛の鍵盤楽器
その音色で「話す」と「歌う」を見事に表現

J.S.バッハ：クラヴィコード



●アンドラーシュ・シフ (クラヴィコード)

ユニバーサル ミュージック
UCCE2100/1
¥5,280 / 1月27日発売

ここに聴くクラヴィコードは1743年製のレプリカで、俗にピアノの前身と言われているものよりも遥かにシンプルかつ小型。146×44×13.4cmと小型の卓上型で、左寄りに鍵盤、右には弦が露出していて、非常に素朴な響きを聴かせる。しかし、その音色はあたかも「話す」と「歌う」が見事に表現され、演奏者のシフ自身もこの楽器のおかげでより精緻に、より明解に聴き、演奏するようになったという。バッハにとっても身近な楽器だったようだ。2018年、ベートーヴェン・ハウスでの収録で、美しいホールトーンを交え窮屈さのない空間に繊細な響きを聴かせる。

『LITTLE BIRD - Live in Gothenburg』



●アレクサンデル・ローヴマルク (ヴォーカル)

Prophone (収録:コーシン)
PCD295
オープン価格/1月13日発売

北欧レーベル、プロフォンからリリースされた男性ヴォーカル盤だ。アレクサンデル・ローヴマルクはジャズベースを学ぶも、ソロ・ヴォーカリストに転向。本作は彼の2ndアルバムで、ヨーテボリ(スウェーデン)でのコンサートライブ録音である。若々しくノリのよいハイトーンヴォイスで音質はすこぶる優秀。「A列車で行こう」「オール・オア・ナッシング・アット・オール」など、新旧とりまぜたスタンダードナンバーを表情豊かに歌い上げる。曲ごとにピアノ、ドラム、ベースなどインストのサウンドが多彩に変化。サクソフォーン、パーカッションも加わる生々しくもエネルギッシュな表現が聴きどころだ。

『凧 -RIN-』



●安田美充央、石井 彰 (ピアノ)

ブルクワレーベル
POUR1009
¥3,000/1月25日発売

ピアノデュオの優秀盤をレビューしたかった。録音も再生も難しいピアノが2台。それだけでオーディオ魂が覚醒するようだが、作家・榎本憲男プロデュースによる「凧」がそれだ。安田美充央と石井 彰による2台ジャズピアノは、かながわアートホールで収録され、スタジオ録音にない見事なトーンバランスに聴き入った次第。左に安田、右には石井が定位して、弱音のみずみずしさや余韻が際立つ印象である。オーディオ再生の極意は“弱音”にあり、を身上とする筆者好みのハイクオリティサウンド。一音一音の明快な粒立ちや重なり合った音色を愉しむ。そんな生き生きとしたライブ感に浸りたい。